

# 水辺の 生物



## ダビドサナエ

不均翅亜目サナエトンボ科ダビドサナエ属

写真提供：高橋克成氏

校閲：小西正泰氏

**春**の谷間に現れる比較的小型のトンボである。和名は、19世紀半ばに中国やチベットで活躍したフランス人宣教師・動物学者 P.David に捧げられた学名(属名)に由来する。

腹長は 31mm~36mm ほどでオスがやや大きく、後翅の長さは雌雄ともに 27mm~33mm ほど(写真はオス)。成虫の出現期は 3月下旬から 7月上旬。あまり飛び回らず、止まっていることのほうが多い。

サナエトンボ科の昆虫は世界で約 870 種、日本では 27 種が知られている。サナエトンボとは、早苗の時期に成虫が現れることに由来する。一般に止水域に発生するが、ダビドサナエは流水域で生活する。日本の固有種で、本州、四国、九州、対馬、西表島などに分布しており、生息域は主に河川の上流域、山間の溪流などである。幼虫は平たいやや幅広の紡錘形をした中型のヤゴで、流れの緩やかな淵などの水中から伸びる植物の根元や砂泥の中に浅く潜ったり、水底に沈んだ植物性の堆積物の下に隠れたりして暮らし、約 2 年で成虫になる。

大部分のトンボは、植物の組織内に産卵するタイプ、飛びながら尾端を水に打ち付けて水中に産卵するタイプの 2 つに大別される。しかし本種の産卵方法はそのどちらにも属さない特殊な例の一つだ。溪流の上に腹部をほぼ水平に保ってホバリングしながら、卵を水面や水際の湿ったコケの上などにパラパラと産み落とす。卵の形状も特殊で、水中産卵タイプの卵の多くは卵殻の表面がゼラチン質の粘着性皮膜で覆われていて水底のいろいろなものに付着するが、ダビドサナエの卵には粘着性の皮膜がまったくない。さらに卵殻の表面は一般に平滑なものが多いなかで、ダビドサナエの卵殻には細かい彫刻模様がある。

参考文献：『原色日本トンボ幼虫・成虫大図鑑』杉村 光俊ほか著、1999年、北海道大学図書刊行会  
『日本動物大百科 第8巻 昆虫 I』石井実ほか編、1996年、平凡社

これまでに紹介した「水辺の生物」のうち主なものを水資源機構ホームページに掲載しています  
(トップページ右側「水辺の生物」をクリック)